

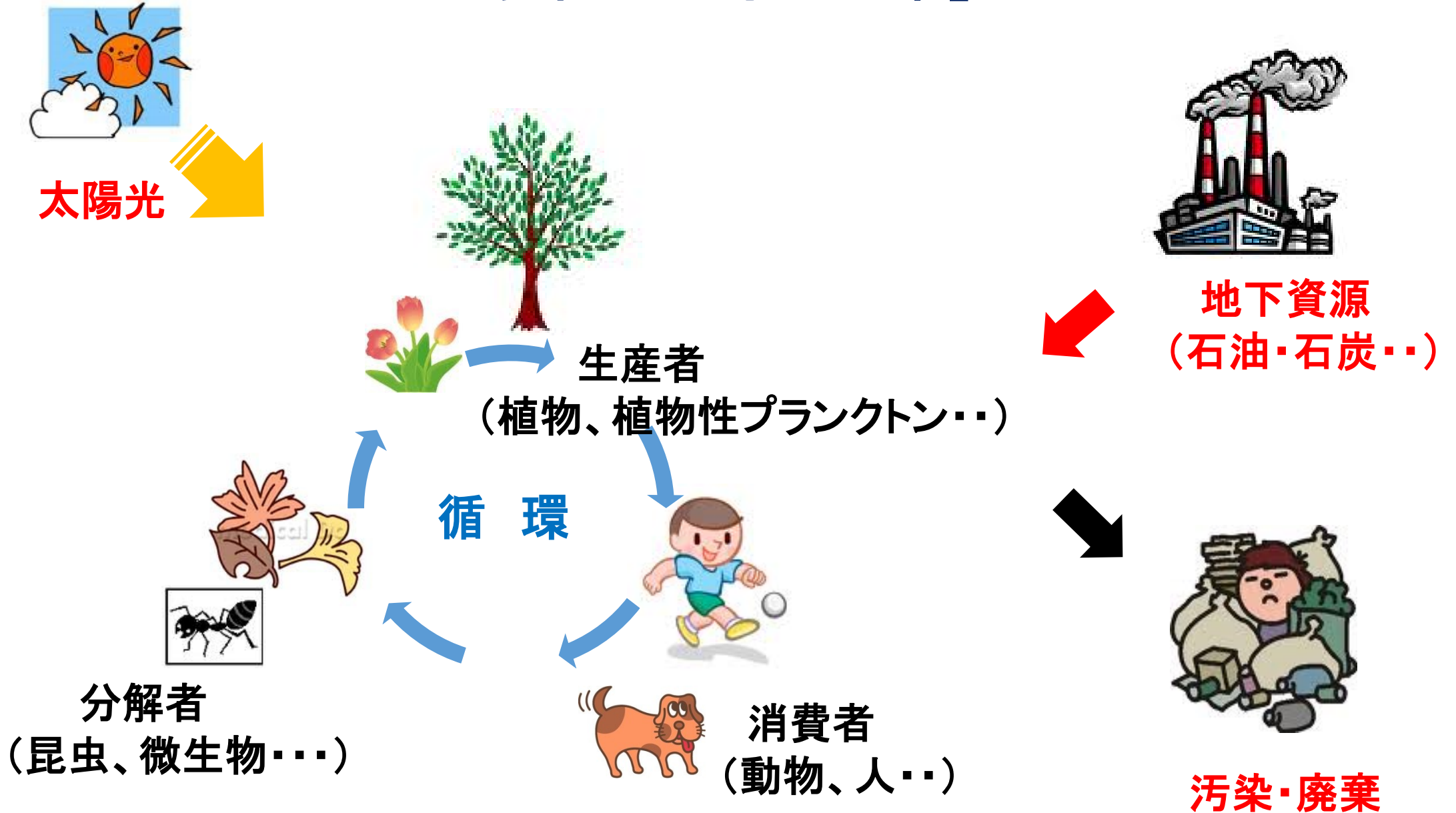
未来のための「江戸の暮らし」

(逝きし世の面影 渡辺京二著)より





「現在の地球生態系」



石油も石炭も利用されていなかった**150年前の日本**

太陽エネルギーを吸収して成長する**植物**、

それを餌とする**鳥や動物**、

それから作られる炭や油や蠟と**農業加工品**、

植物性プランクトンを餌として育った**魚**や**魚から採れる油**

それらが、**食糧**と**エネルギー**のすべて

江戸の社会

① 自然共生型社会

植物、植物性プランクトン、藻類の、**光合成量**の利用社会。

1年間の使用エネルギーは、1年間の自然の生長量。

（自国産の食料、そして自然再生エネルギーがすべて）

（火力発電所も**原発**もない！）

持続型社会が 250年にわたり維持されてきた、**江戸という時代**

鎖国は現代の「宇宙船地球号」に符合する





江戸の風景

都市部から自然は急激に失われる→それを補うように

園芸植物の普及（朝顔市、ほおづき市、植木市・・・）

植木屋が商売として成立。

染井吉野で知られる染井村は、園芸産地として有名で、春や夏には絶好の行楽地に。

ブスケ (日本初お雇い外人、法律家・弁護士、1872年)

江戸の美は田園的なもの。

人々は自然に対し素朴で、ほとんど度外れた愛をしめす。

ヒューブナー (オーストリアの貴族、外交官、1871年)

日本人は自然が好きだ。

ヨーロッパでは美的感覚は教育によってのみ、育成される。

ところが日本人の美的感覚は生まれつきなものだ。

吉宗は墨田堤や飛鳥山に桜を植えさせ、
中野には桃園をつくる。

「有徳院殿御実記付録」によれば、管理する農民には
租税を免除して、自然の育成に努めた

→ 自然保護を目的とした、世界初の税制優遇措置
(ヨーロッパより以前)

ベルク(ドイツ人書記、幕末)

日本の市民の最大の楽しみは、天気の良い日に、
妻子や親友と一緒に、**自然の中でのびのびと過ごすこと**である。
墓地や神社の境内や、美しい自然の中にある茶店に行く。
老人たちは愉快に談笑し、若い者は弓の射的に興じたり、
釣りをしたりする。
それらは若い女性たちにも好まれる遊びである。



幕末に来日したイギリスの植物学者

ロバート・フォーチュン (1860年、「江戸と北京」)

江戸は東洋における大都市で、城は深い堀、緑の堤防、
諸公の邸宅、広い街路などに囲まれている。

美しい湾はいつも心が踊らされる。江戸城に近い丘から
展望した風景は、ヨーロッパや諸外国のどの都市と比較しても、
優るとも決して劣りはしないだろう。

それらの谷間や樹木の茂る丘、
亭々とした木々で縁取られた静かな道や常緑樹の生け垣、
これらの美しさは、世界のどこの都市も及ばない。

人口の増加に伴う 自然の**崩壊**と**保全、再生**→

景観は知恵と努力、庶民の美意識の結晶





江戸の人口(周辺農地の生産力と人口)

都市として成立・・・15世紀半ば(太田道灌の江戸城築城)

家康の江戸開府(1590年) 人口 15万人・・・

かつての平城京や平安京と同程度

家光の時代(1640年) 人口 40万人・・・

当時の京都と同程度

綱吉の時代(1690年)元禄 人口 90万人と倍増

吉宗の時代(1720年) 人口100万人を突破・・・

産業革命以前の世界唯一の百万都市

以後人口は安定・・・ 人口100万-150万人で推移

総人口、1500万人（1600年代）～

3000万人（1750年以降）

人口（消費）を賄う生産とセツトの都市

江戸の社会

② 循環型社会

人間の**排せつ物**や**囲炉裏の灰**などを

火山灰土壌（関東ローム層）の**田畑に戻す**仕組みが、

江戸の最大の物流システム（金肥）

多くの修理業、古着屋、古道具屋・・・

（江戸の基幹産業は**リユース・リサイクル業**）

江戸の知恵

映画やテレビに登場する江戸の裏長屋 ＝

不潔に見えるが、しかし、実は**大変清潔**

24時間水道（神田上水、玉川上水など）が利用できたのは

世界で唯一江戸だけ。



長屋一所帯当たりの一日に出される**ゴミの量** =

大人の**男性の親指の先**の量

①食べ物は鰯の頭から大根の葉まで消費

(もったいない、バチが当たる)

②出来る限りあらゆる物質を反復利用し、再活用

③リサイクルシステムが江戸のライフスタイル

落語に登場する「熊さん、八さんの世界」

相談に行く長屋の大家さん → 長屋のオーナーではなく、管理人。

店子から家賃を収集し、その歩合をオーナーから得ている。

そして、最大の収入源は、長屋から出る屎尿の販売権。

下肥を汲みにくる農家から、野菜や米の他に、金子を受け取る。

価格は年々高騰 → 江戸時代の糞尿は**金肥（きんぴ）**と呼ばれる。

*お金を出して購入する肥料を金肥と呼ぶ。現在では、化学肥料のこと。

糞尿は廃棄物どころか、農業生産のための

最も重要な肥料(資源) → 売買の対象

人間の排泄物の売買は、江戸期最大の物流システム。

例えば、大名屋敷の屎尿は庶民に比べて食事が良かったために
高値で取引され、そのため野菜の価格が上がり、奉行所が乗り
出す騒ぎも記録に残っている

「店中（たなじゅう）の、尻で大家は餅をつき」（川柳）

金肥(人間の糞尿)の役割:

江戸開城当時の**不毛な火山灰土壌**(関東ローム層)に**有機質肥料(金肥)**

→ **豊かな農地に変化**(黒ボク土壌)

→ そこから生産される農作物が、

100万都市江戸の人口と台所(生活)を支えた。

「**生産**」と「**消費**」、「食」と「排泄」の循環が江戸を成立させた。



江戸の職業

研師（刃物）、めたて屋（ノコギリ）、雪駄直し（下駄）、鋳掛け屋（鍋釜）、
羅宇屋（煙管）、焼継屋（漆や白玉粉を用いた茶碗や皿などの修理）

→ 数々の修理業

江戸では使えるものは徹底的に再利用

例えば、浴衣は古くなると寝巻、さらに古くなるとおむつに、
最後は雑巾に利用。 世田谷の「ボロ市」はその名残

幕末には古着屋が3987軒、古道具屋が3672軒
そば屋の3763軒と比較しても多い。

現在の東京、ラーメン店は3300軒、そば・うどん店5700軒

修繕、リサイクル業が江戸の「基幹産業」

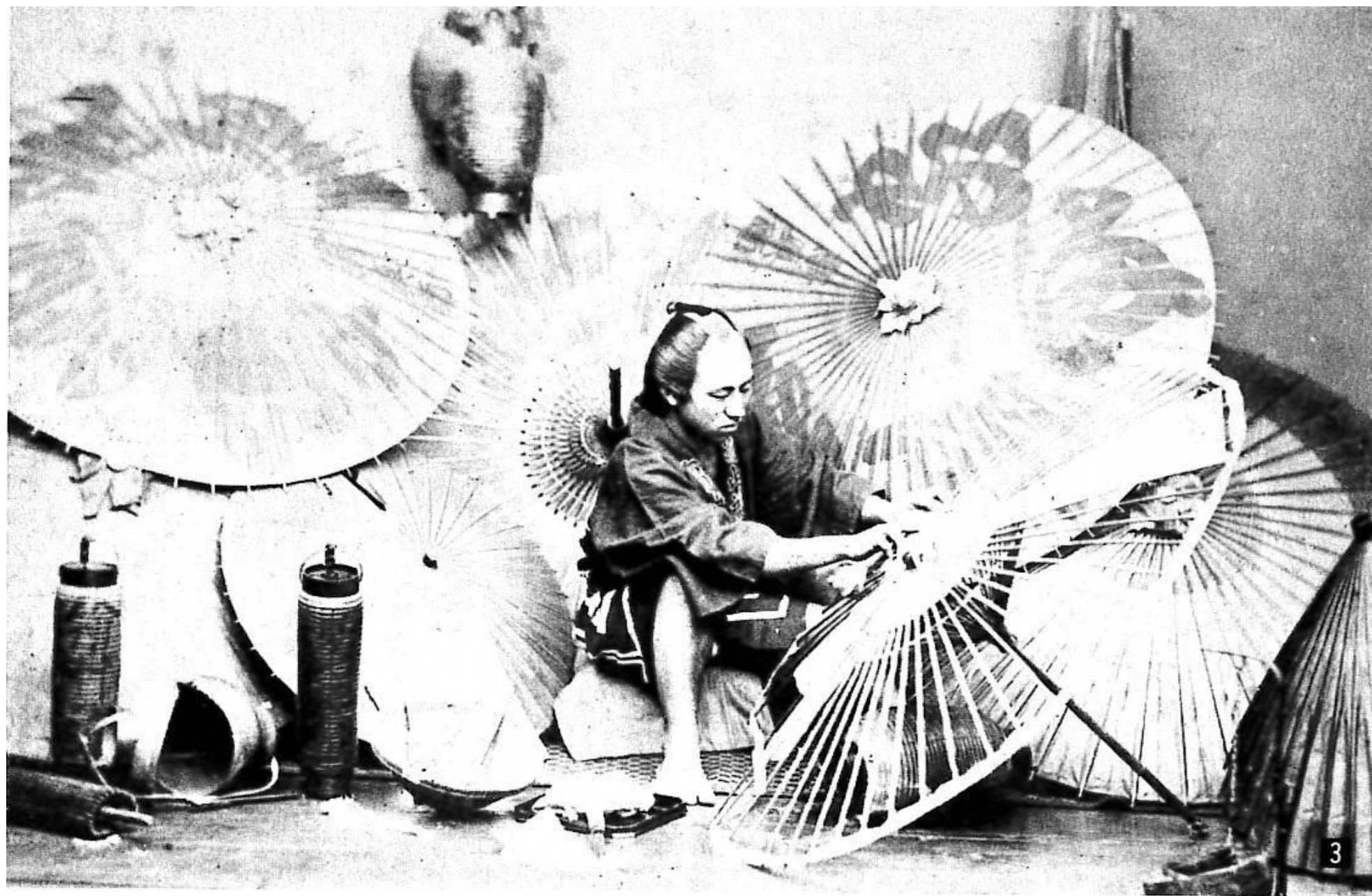


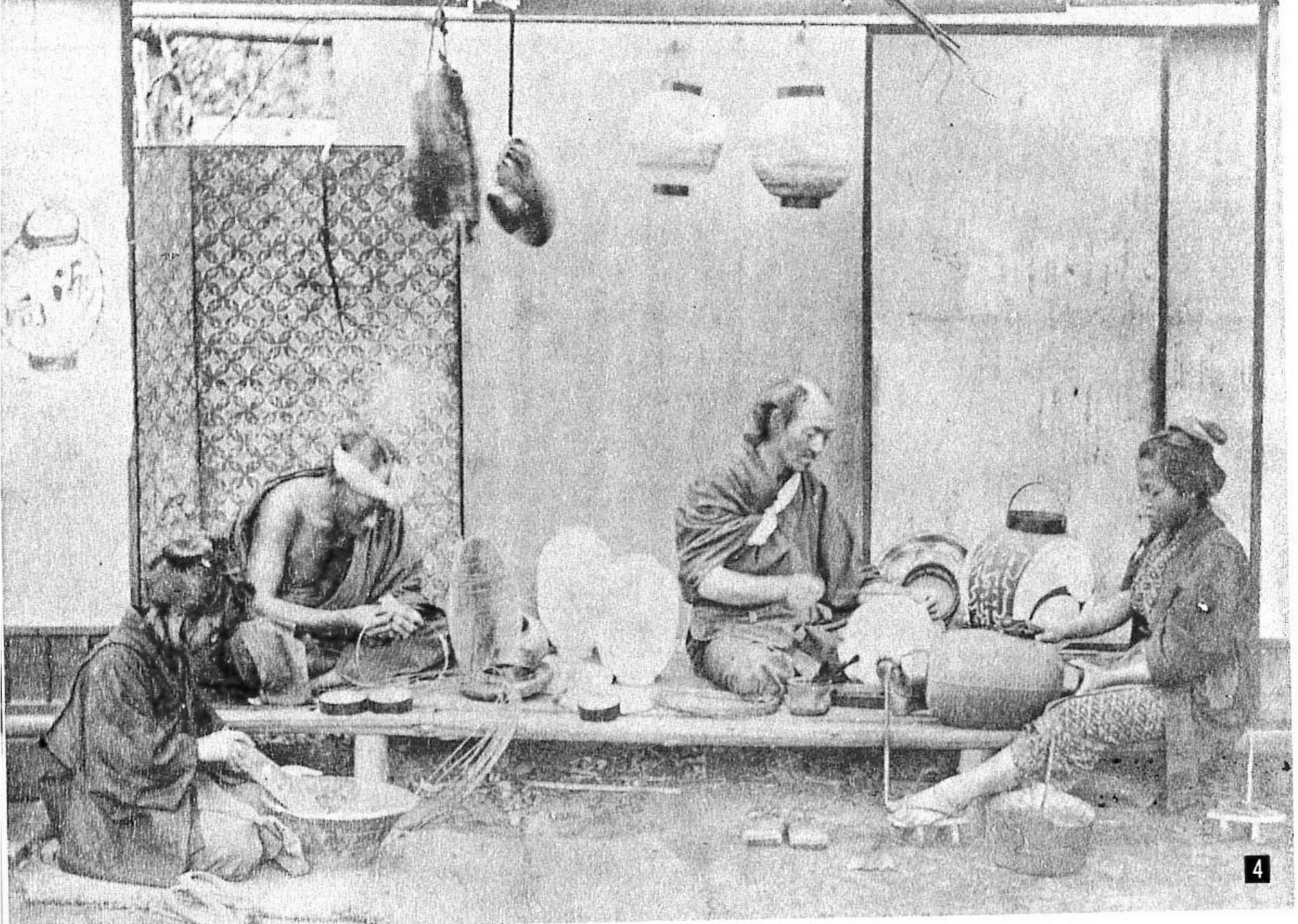












江戸の職業

- **焼き接ぎ屋**：茶碗や皿が割れてしまったときに接着剤や焼き直し。接着剤には白玉粉が使われていた。
- **鋳掛屋**：一家に欠かせない家財道具であった鍋や釜が、穴が空いたり壊れたりしたものの修理。鋳掛屋さんは昭和30年台まで存在。
- **ゲタ歯入れ**：下駄、雪駄の歯を交換する修理職人。下駄、雪駄、草履で業者が異なっていた。
- **提灯の張替え**：提灯に屋号を入れる有料サービスもあり
- **羅宇屋（らうや）**：キセルの修理職人。キセルの中にたまったヤニを取り除き、部品を交換する。
- **傘の修理職人**
- **箍屋（たがや）**：「箍（たが）が外れる」という慣用句。桶や樽を締め付ける箍を修理する職人。
- **刃物研ぎ**
- **鏡研ぎ**：当時の鏡は水銀メッキで反射面を作っており、時が経つうちに曇る。メッキをし直す職人。
- **臼の目立て**：小麦粉などを挽く石臼の目を直す職人。
- **算盤直し**：そろばんの修理職人
- **錠前直し**：壊れた錠前を修理する職人
- **古着屋**：繊維は高価。古着屋には服だけではなくて布切れも販売。
古着屋で買ったものをボロになるまで着て、さらに子供服に仕立て直し、おむつや雑巾に再利用し、最後は燃やして灰にして**灰買取屋**に売っていた。

- **蠟燭の流れ買い**：溶け出したろうを買い取って、ろうそくを再生する職人。
- **箒買い**：箒の売買。使い古しの箒を買い取って、箒のシュロの部分に縄にしたり、タワシに作り直していた。
- **木っ端売り**：廃材や木の端切れを拾って燃料として売る。
- **紙くず買い**：現在のちり紙交換業者。商家などに出入りし、紙を回収し、古紙と紙くずに分けて、紙をこし返す業者に売って紙を再生していた。再生紙は値段が安かったので落し紙（トイレットペーパー）として利用された。
- **紙くず拾い**：街中で紙くずを拾って古紙問屋に売る人たち。
- **灰買い**：灰は肥料、洗剤、しみ抜き、洗剤、シャンプーとして需要が多くあり、灰を買って必要なところに売る灰買い業者。
- **下肥買い**：排泄物を買取る業者。江戸近郊の農家が排泄物を回収し、野菜などと交換。排泄物は貴重な有機肥料として使われた。
- **馬糞拾い**：道端に落ちている馬糞を農家に売る人。
- **取っけえべえ**：「取っけえべえ、取っけえべえ」と歌いながら歩く行商人で、子どもたちに古釘など金属を集めさせて、飴などと交換する。
- **すき髪買い**：女性が髪を解くときに出る髪の毛を買い集めて「かもじ」という足し毛、添え毛（現在で言うエクステンション）にしていた。
- **献残屋（けんざんや）**：不要な贈答品を買い取り、包装などを変えて再生して新たな贈答品として売る。贈答品の多い武家のためのリサイクル業者。
- **付け木売り**：木の端を薄く削って硫黄を塗って現在のマッチのようなものを作る。

隅田川の花見



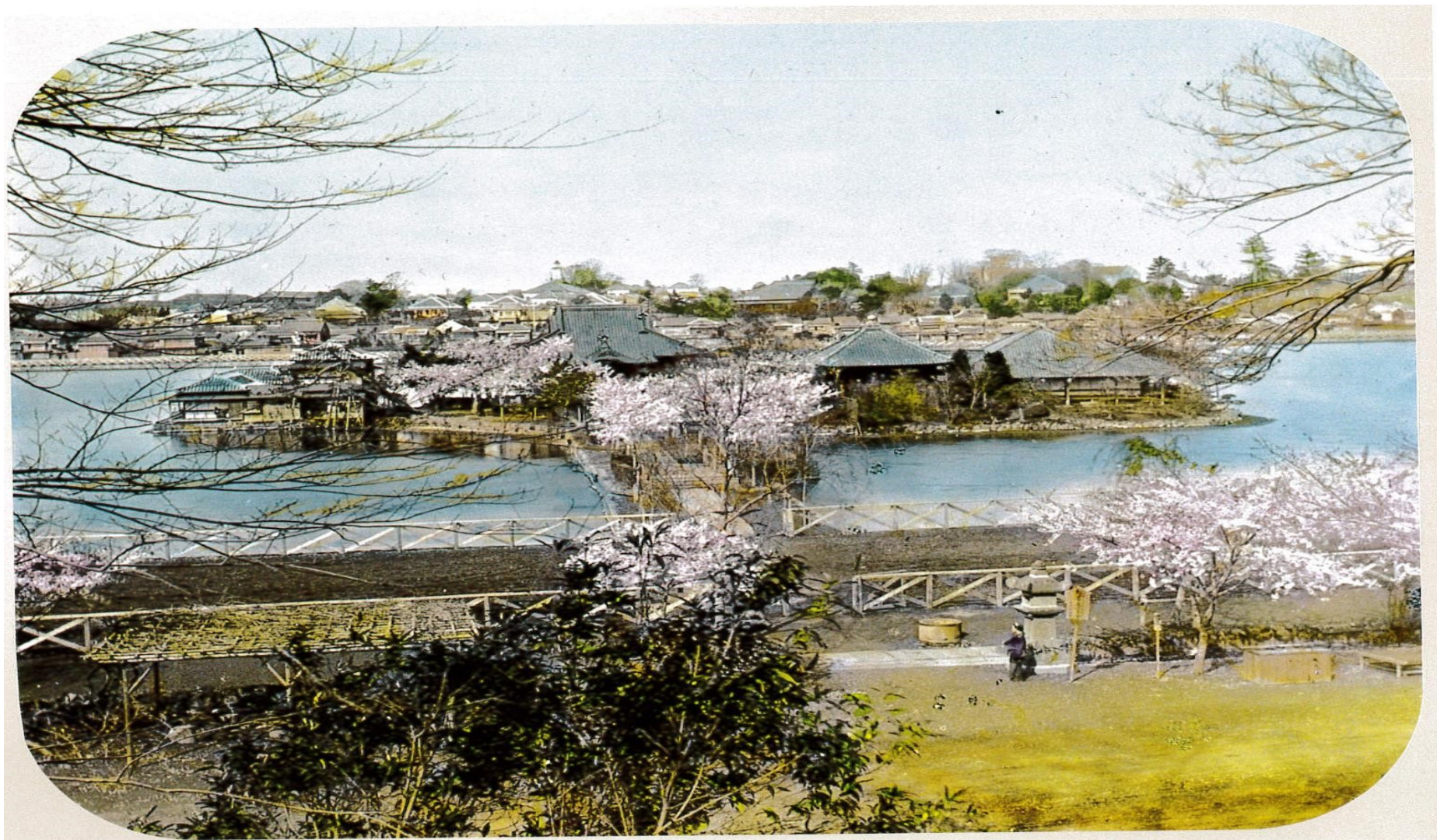
19世紀のセーヌ川で渡船が転覆し多くの犠牲者

その原因は、完備された水道から、直接セーヌ川に捨てられた汚物から発生したメタンガスによる**窒息死**。

同じ時代の江戸の隅田川や多摩川には**白魚や鮎が遡上**



都市と農村のエコシステム



都市と周辺の農村を一体としたエコシステムが完成
(物やエネルギーの循環系)

この社会の「システム」と、人々の「節度」→
開国時に多くの西洋人に、「世界一綺麗な都市」
と言わせた所以。

この二つが調和したものが「風土」「文化」となる。

労働生産性ではなく、

資源生産性を目指した江戸時代



アリス・ベーコン

(華族女子教育のお雇いアメリカ人、1888年)

日本の職人は本能的に美意識を強く持っているので、
金銭的に儲かろうが関係なく、彼らの手から作り出されるものはみな美しい。

庶民が使う陶器を扱うお店に行くと、色、形、装飾には美の
輝きがあり、

ここ日本では貧しい人々の食卓でさえも、最高級の**優美**さと
繊細さがある。

いまアメリカやイギリスで始められている、大都会に住む
貧し人々の美意識を啓発しようという運動は、この国には全
く必要ないことだけは確かである。

労働時間がコストではなく、**美意識**がコストの世界

外国人の見た江戸期の人々

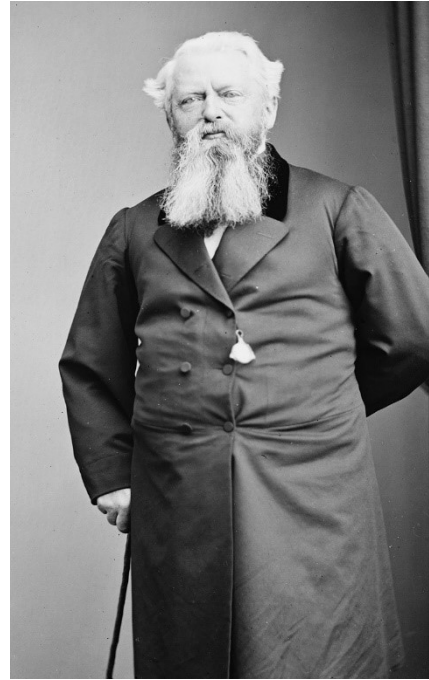
・多くの外国人の感想

ハリス（日米通商条約を結ぶ、はじめての江戸入府、1857年）

「彼らは皆よく肥え、身なりもよく、**幸福**そうである。

一見したところ、富者も貧者もない。

これがおそらく人民の本当の**幸福**の姿というものだろう。私は時として日本を開国して、外国の影響を受けさせることが、果たして、この人々の普遍的な**幸福**を増進することになるかどうか、疑わしくなる。



私は質素と正直の黄金時代を、いずれの他の国におけるよりも多く日本において見出す。

生命と財産の安全、全般の人々の質素と満足とは、
現在の日本の顕著な姿であるように思われる」

・ ペリー (第2回遠征で、1854年)

「人々は幸福で満足そうだ」。



ハリス(下田の寒村柿崎で、1856年)

柿崎は小さくて貧しい漁村であるが、住民の身なりはさっぱりして
いて、態度は丁寧である。

世界のあらゆる国で貧乏にいつも付き物になっている不潔さという
ものが、少しも見られない。彼らの家屋は必要なだけの清潔さを保っ
ている。この土地は貧困で、住民はいずれも豊かでなく、ただ、生活
するだけで精一杯で装飾的なものに目をむける余裕はない。

それでも人々は楽しく暮らしており、食べたいだけ食べ、着る物にも困ってはいない。それに家屋は清潔で日当たりもよく気持ちが良い。

世界のいかなる地方においても、労働者の社会で下田におけるよりもよい生活を送っているところはあるまい。

私はこれまで、容貌に窮乏をあらわしている人間を一人も見えていない。



子供たちの顔はみな満月のように丸々と肥えているし、
男女ともすこぶる肉付きがよい。

彼らが充分に食べていないと想像する事はいささかもできない。

下田周辺の住民は、社会階層として富裕な層に属してはおらず、概して貧しい。しかし、この貧民は、貧乏に付き物の悲惨な兆候をいささかも示しておらず、

衣食住の点で世界の同階層と比較すれば、最も満足すべき状態にある。



モース

（東京帝国大学教授、大森貝塚の発見者、1882年）

日本には貧乏人は存在するが、貧困なるものは存在しない。

- ・ そして懸念

ウェストン

(近代登山の開拓者、上高地、「知られざる日本を旅して」、1925年)

明日の日本が、外面的な物質的進歩と革新の分野において、今日の日本より、はるかに富んだ、おそらくある点ではより良い国になるのは確かなことであろう。

しかし、昨日の日本がそうであったように、昔のような、素朴で、絵のように美しい国、になることは決してあるまい。



・彼らが愛した風土

イザベラ・バード

(英国婦人一人で東北、北海道を旅行「日本奥地紀行」、1878年)

米沢平野は南に繁栄する米沢の町、北には人で賑わう赤湯温泉を
ひかえ、まさに「エデンの園」だ。

繁栄し自信に満ち、田畑の全てがそれを耕作する人々に属する、
稔り多き微笑みの地、アジアの「アルカディア」なのだ。

人々はつる草やイチジクや柘榴の影で、
抑圧を免れて暮らしている。

アジア的専制のもとでは注目すべき光景だ。

鋤（すき）のかわりに鉛筆でかきならされたような農地。
米、綿、トウモロコシ、タバコ、麻、藍、豆類、ナス、クルミ、
瓜、キュウリ、柿、柘榴が豊富に栽培されている。

いたるところに**繁栄した美しい村々**がある。

彫刻のある梁と、どっしりした瓦屋根を備えた大きな家が、
柿や柘榴に隠れてそれぞれの敷地に建っており、
格子棚に這わせたつる草の下には花園がある。

そしてプライバシーは、丈の高い、よく刈り込まれた柘榴や
スギの遮蔽物によって保たれている。

上杉鷹山が越後からの移封の後、多くの家臣団を

養うため、必死になって創った、

食べるため、生きるため、の風景



イザベラ・バードが美しさを本国に伝え、

「イングリッシュ・ガーデン」の基となる。



ジョージ・スミス

(香港主教、長崎から大村湾に遠乗りに出かけて)

いっそう進んで行くと、切り立った山と海の景観から、肥沃な谷の
豊かで緑濃い景観へと変わった。

それぞれの谷には農作物が満ち溢れ、ゆるやかな斜面から、さして
高くない丘の頂まで、米、麦、ライ麦、アブラナによって覆われてい
た。杉や樅に似た木々が、黄金色に輝く自然の微笑みの中に見事には
め込まれたエメラルドのように点在していた。



椿、バラ、さらにあらゆる種類の常緑樹が、行く手に花房のように垂れかかり、その多くは舗装のよい、広い道の道幅一杯に広がっている。

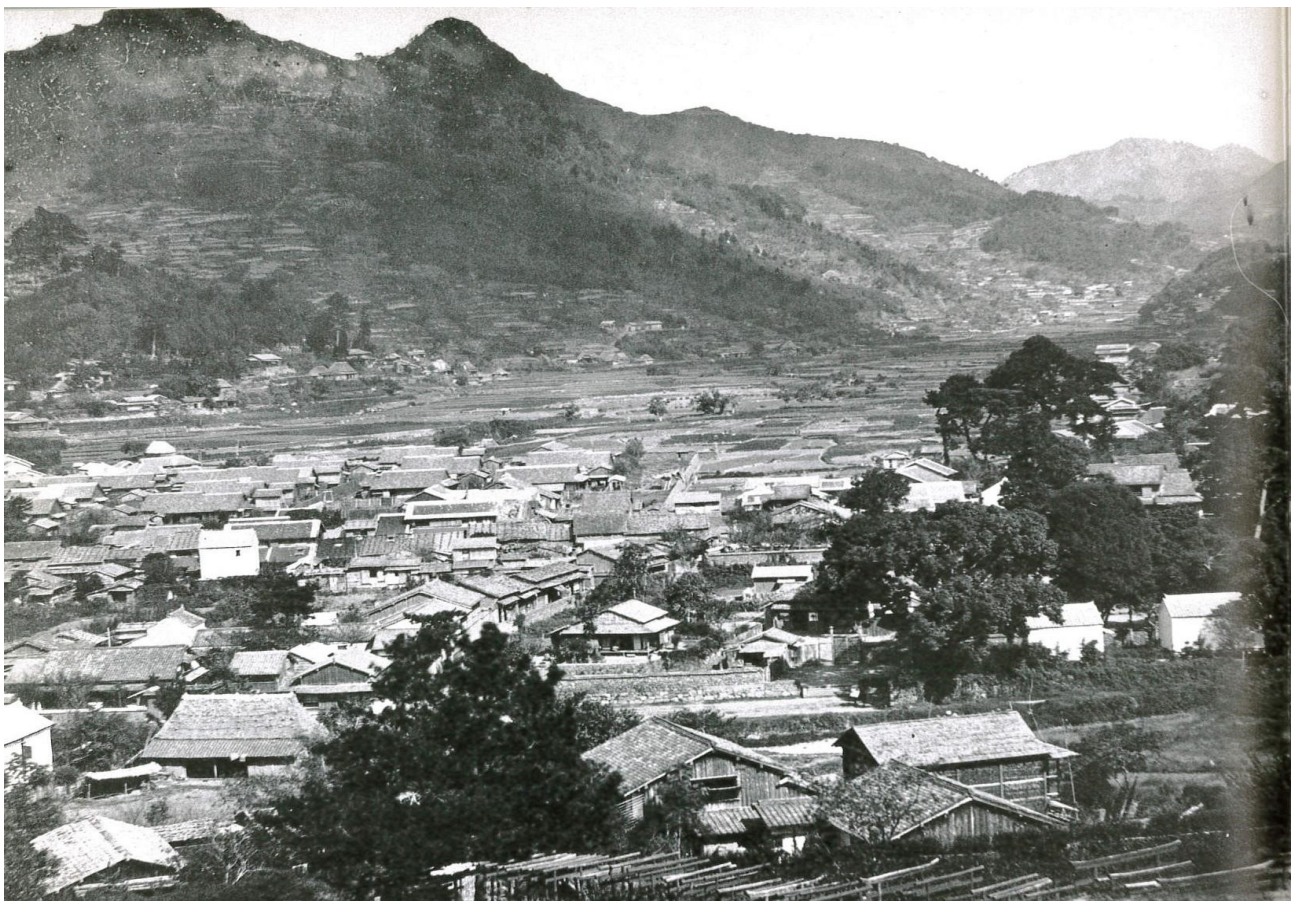
村人たちがあらゆる方角から現れて、**好意のしるし**を示すやら、お菓子とかお茶とか水を差し出すやらして、我々を**歓迎**した。

帰り道では大勢の女子供が家の外に立っていて、我々には花を、馬には馬草を差し出すのだった。

今日は日曜（ゾンダーク）なのかと尋ねる者もいるし、金ボタンをせがむ者もいる。

道の片側によって、あわてて飛びのく女もいる。乗り手ではなく、落ち着きの無い馬を怖がって道を譲るのだ。

そしてびっくりした様子で大笑いする。



- ・日本の封建制度は知っていたが、
豊かな農村を見て愕然とする

オルコック

(初代駐日英国公使富士登山の折に日本の農村を見て、1860年)

小田原から箱根にいたる道路は他に類の無いほど美しい。

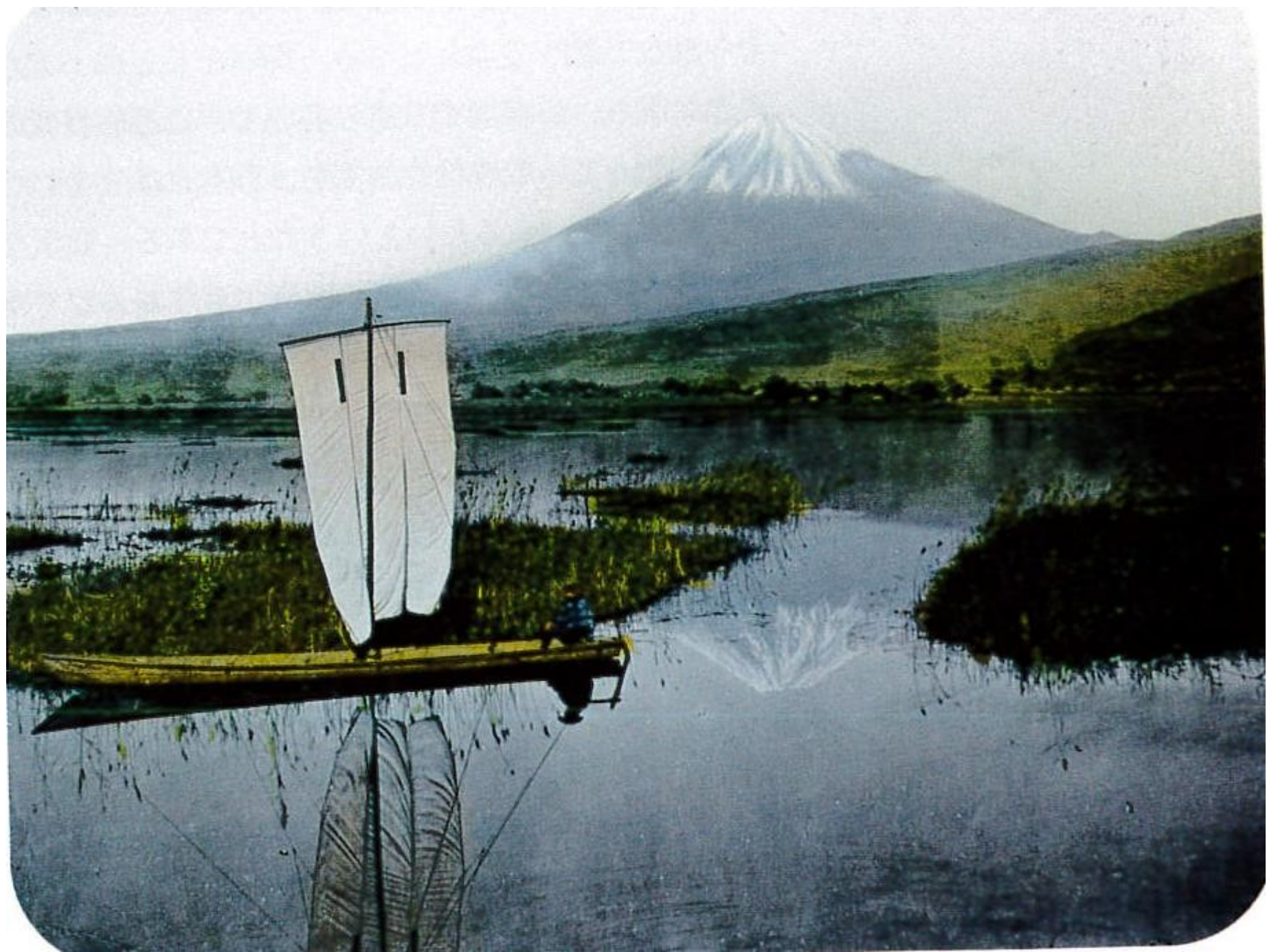
肥沃な土壌とよい気候と勤勉な国民がここに在った。

波打つ稲田、タバコや綿の畑、カレーで味付けると、とても美味しいナス、ハスのような葉をしたサトイモ、そしてサツマイモ。

立派な赤い実を付けた柿の木や、金色の実を付けた柑橘類の木々が村々の周囲に群れをなして生えている。 百フィート以上の立派な杉林に囲まれた小さな村の一本の杉の周囲を測ると、16フィート3インチ（約5メートル）あった。

山峡をつらぬく堤防は桃色のアジサイで輝き、高度が増すにつれ、優雅なシャジンの花畑が広がる。





山岳地帯の只中で、突如として百軒ばかりの閑静な美しい村に出会う。

封建領主の圧制的な支配や、全労働者階級が苦しめられている抑圧については、かねてから多くの事を聞いている。

だが、これらの良く耕作された谷間を横切って、非常な豊かさの中で所帯を営んでいる幸福で満ち足りた、暮らし向きの良さ
そんな住民を見ていると、これが圧政に苦しみ、

苛酷な税金を取り立てられて困窮している土地だとは、とても
信じがたい。むしろ、反対に、ヨーロッパの何処にも、
こんなに幸福で、暮らし向きの良い農民はいないし、
また、これほどまでに**温和**で、贈り物の豊富な風土は
どこにもないであろう。

オリファント

（日英修好通商条約締結主席外交官秘書、1858年）

個人が**共同体**のために**犠牲**になる日本で、
各自が全く**幸福で満足**しているように見えることは、
驚くべき事実である。

自治の確立していた「江戸時代」

1000万人の都市「東京」

東京の役人 **司法**(東京地方裁判所)・**行政**(都庁)・**警察**(警視庁)を、
2,500人 20,000人 47,000人 計**70,000**人

100万人の都市「江戸」

江戸の役人 **50人の奉行所**(司法・行政・警察。北町、南町の月番制)

それを支えた、町人の自治と責任感(組、町役人)

アリス・ベーコン (華族女子教育、1888年)

われわれアメリカ人が**召使**の標準的態度とみなすのは、**黙って主人に従う**態度である。

しかし、日本の**使用人**は、自分の主人の人となりとその利益を、当人以上に良く知っており、主人が無知であったり誤った情報を与えられている場合には、**彼自身の知識によって事を運ぼうとする**。

仮にそれが命令への不服従であっても、雇い主のために最善を計ろうとする。

フィッセル（長崎出島勤務オランダ人外交官、1858年）

日本人は完全な専制主義の下に生活しており、何の幸福も満足も享受していないと普通想像されている。

ところが私は彼ら日本人と交際してみて、全く反対の現象を経験した。

専制主義はこの国では、ただ名目だけであって、実際には存在しない。

自分たちの義務を遂行する日本人たちは、完全に自由であり、独立的である。

奴隷制度という言葉は知られておらず、封建的奉仕という関係さえも報酬なしには行われたい。

勤勉な職人は高い尊敬を受けており、下層階級のものもほぼ満足している。日本には食べ物に欠くほどの貧乏人は存在しない。

また、上級者と下級者の関係は丁寧で温和であり、それを見れば満足と信頼が行き渡っていることを知ることができよう。

オリファント

（日英修好通商条約締結主席外交官秘書、1858年）

おそらく東洋で、**女性**にこれほど多くの**自由**と、

大きな**社会的享楽**が与えられている国はない。

まさに日本人の女性の地位は**西洋のそれに近い**。

・貧しい農村

イザベラ・バード(前出、奥会津で)

私たちにとって、悲惨な種類の貧困とは通常、怠惰と酒びたりに結びついている。

しかし、日本の農民の間では、前者は知られていないし、後者は稀である。

彼らの勤勉には限りが無いし、安息日も無く仕事が無い時に休日を取るだけだ。

彼らの鋤による農作業は、その地方を一個の美しく整えられた庭園
に変え、そこでは一本の雑草も見つからない。

彼らはたいそう儉約家だし、あらゆるものを利用して役立たせる。

土地にはたっぷり肥料をやり、作物の輪作も知っている。

わが国の進歩した農業技術から学ぶべきことがあるとしても、それ
はほんの少しである。



・日本人の気質は
イザベラ・バード(前出、奥会津で)

その日の旅程を終えて宿に着いた時、馬の革帯が一つ無くなっていた。もう暗くなっていたのに、その男はそれを探しに一里も引き返し、私が何銭か与えようとしたのを、

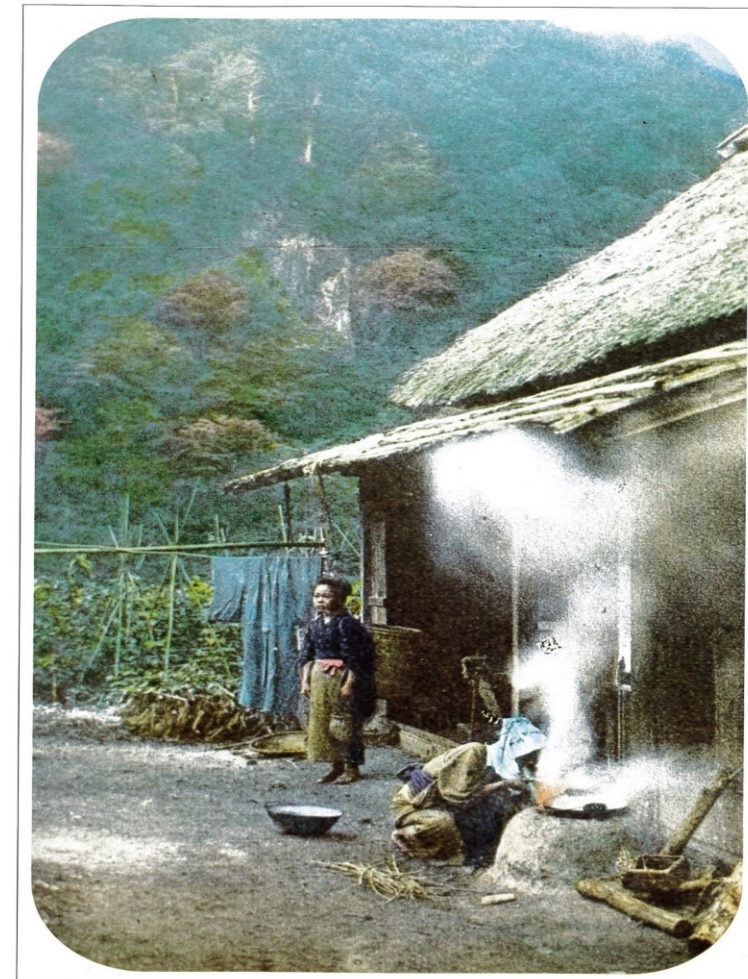
目的地まで全ての物を、
きちんと届けるのが自分の
責任だといって拒んだ。



新潟県と山形県の悲惨な山中の村で、みっともない格好の女は、
休息した場所で普通置いてゆくことになっている2～3銭を断固
として受け取らなかった。

貧しくてその家にはお茶が無かったために、
私がお茶ではなく水を飲んだからだというのだ。

私が無理に金を渡すと、
彼女はそれを私の通訳に返した。



ヨーロッパの国の多くや、ところによっては確かに英国でも、
女性が外国の衣装で一人旅をすれば現実の不安は無いにしても、無礼
や侮辱にあったり、金をぼられたりするものだが、私は日本において、
一度たりとも無礼な目に逢わなかったし、
法外な料金をふっかけら
れたこともない。



ボーボワール

(21歳のフランス人伯爵、「ジャポン1867年」、1867年)

オーストラリア、ジャワ、シャム、中国と歴訪してきたが、

日本はこの旅行を通じ、歩き回った国の中で一番素晴らしいと感じた。

その素晴らしい日本の中でも、本当の見ものは美術でも演劇でも自然

でもなく、時々刻々の光景、驚くべき奇妙な風習を持つ、一民族と接

触することとなった街中、田園の光景だ。

この鳥籠の町のさえずりの中でふざけている道化者の民衆の調子の良さ、活気、軽妙さ、これは一体何であろう。

日本人の顔つきは生き活きとして愛想よく、才走った風があり、これは最初の一目でピンときた。

女たちはにこやかで小粋、陽気で桜色。

弾薬いれの格好で背中に乗っている帯は、

彼女たちを一寸きびきびした様子に見せてなかなか好ましい。





寺の見物に出かけると、茶屋の娘二人が案内に立ってくれた。二人は互いに腕を組んでふざけたり笑ったり、小さな下駄をカタコト鳴らし、紺色の枝葉模様の半纏と、赤い腰巻を、小麦とヤグルマギクの間にちらつかせながら歩いていく。その漆黒の美しい髪を、技巧を凝らして高々と結い上げた髷が、爽やかなそよ風に乱れても一向気にしない。水田の中で魚を追っている村の小娘たちは、自分の背丈とあまり変わらぬ弟を背負って、異国人に「オハイオ」と陽気に声をかけてくる。





「オハイオやほほ笑み」 「家族とお茶を飲むように、戸口ごとに引き止める招待や花の贈り物」 「住民すべての**丁寧さと愛想の良さ**」は筆舌に尽くしがたく、

確かに日本人は、**「地球上最も礼儀正しい民族」**だと思わない訳にはいかない。

日本人はいささか子供っぽいかもしれないが、**親切と純朴、信頼に満ちた民族**なのだ。

モース(前出)

日本は**子供の天国**だ。世界中で日本ほど、子供が親切に取り扱われ、そして**子供のために深い注意が払われる国はない**。

ニコニコしているところから判断すると、子供たちは朝から晩まで幸福であるらしい。小さな**子供を一人で家へ置いていくようなことは決してない**。

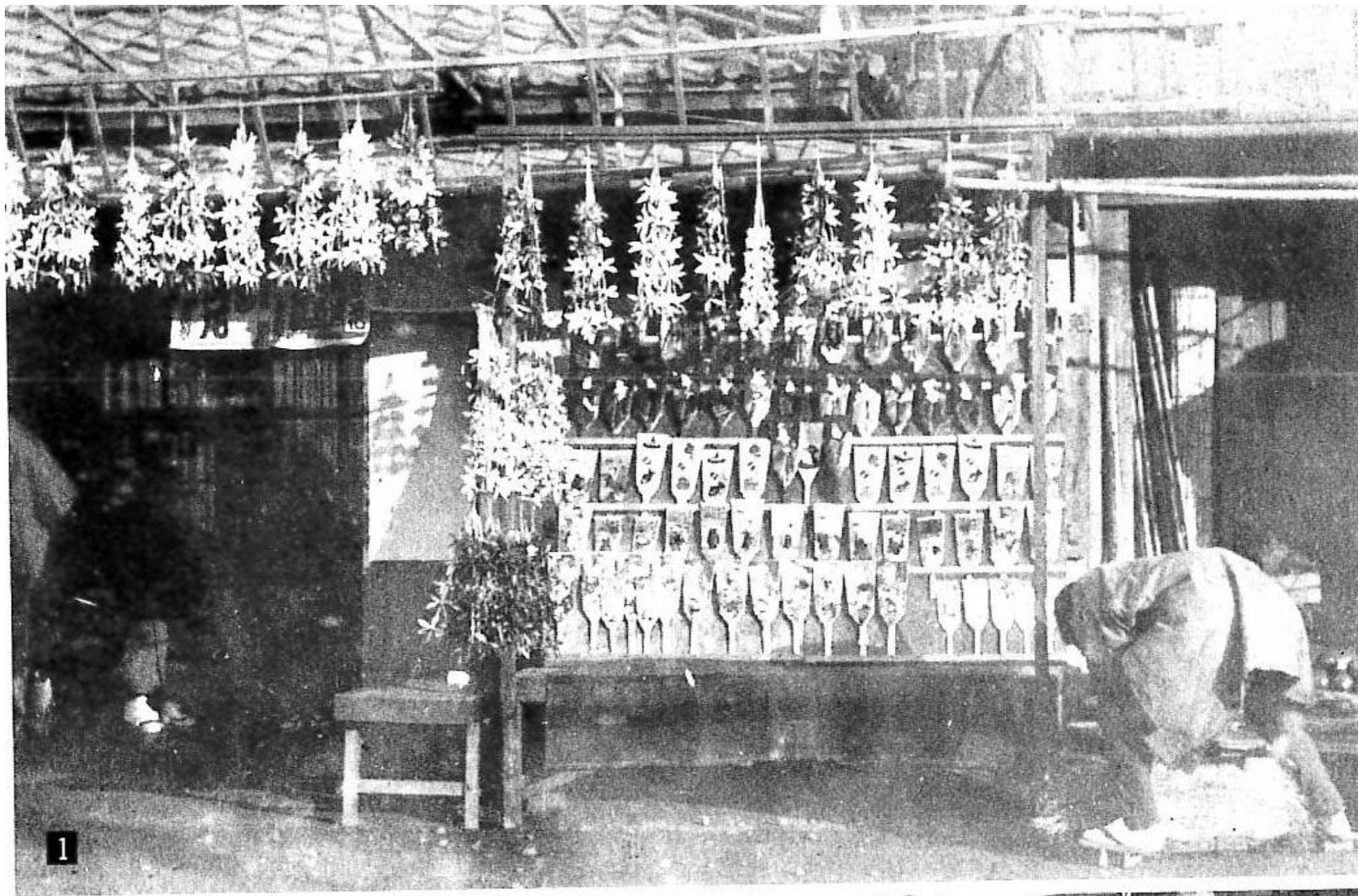
彼らは母親か、より大きな子供の背中にくくられて、とても愉快地に乗りまわし、新鮮な空気を吸い、そして行われつつあるもの全てを見物する。



グリフィス (福井藩校、東京の大学南校の教師、1870年)

日本人のように遊び好きと言って良い様な国民の間では、子供特有の娯楽と大人になってからの娯楽の間に、境界線を引くのは難しい。そこには、ただ喜びと陽気さがあるばかり。笑いはいつも人を魅了するが、こんな場合の日本人の笑いは、他のどこで聞かれる笑い声より、良いものだ。彼らは非常に情愛深く親切的な性質で、そういった善良な人たちは、自ら同様、他人が遊びを楽しむのを見ても嬉しがる。







モース

(東京帝国大学教授、大森貝塚の発見者)

「日本その日その日」／1882年

私はこれらの優しい人々を見れば見るほど、**大きくなりすぎた、**

気のいい、親切な、**よく笑う子供たち**の事を思い出す。

ある点で日本人は、あたかもわが国の子供が、

子供じみているよりも、子供らしい。

ブラック(「ヤング・ジャパン」、1875年)

彼らの無邪気さ、**率直な親切**、**むきだしだが不快ではない好奇心**、自分自身で楽しんだり、人を楽しませようとする愉快的な意思是、我々を気持ちよくさせた。そして、婦人の**美しい作法**や**陽気さ**は、とても魅力的であった。さらに、通りがかりに休もうとする外国人はほとんど例外なく歓待され、「オハヨウ」という気持ちの良い挨拶を受けた。この挨拶は道で会う人、野良で働く人、あるいは村民から絶えず受けるものだった。

オルコック(前出)

幼い子供の守役は、**母親だけとはかぎらない**。

江戸の街頭や店内で、裸のキューピットが、これまた裸に近い頑丈そうな**父親**の腕に抱かれているのを見かけるが、

これは**ごくありふれた光景**である。

父親はこの小さな荷物を抱いて、見るからに慣れた手つきで、やさしく器用にあやしながら、あちこちを歩き回る。



イザベラ・バード(前出)

毎朝6時ごろに12人から14人ぐらいの男が集まり、
みな1, 2歳の子供を抱いている。そこで語られるのは、自分の子供
の体格や知恵についてであり、いわば**子供自慢の集まり**であった。

これほど自分の**子供をかわいがる人々**を見たことがない。
子供を抱いたり、背負ったり、歩くときは手を取り、子供の遊戯を
じっと見たり・・・　そして、子供がいないと詰まらなそうである。

・ イザベラ・バード (前出)

日本は、まるで**子供崇拝の域**に達している。

街の、道という道は子供たちに占領されていた。歓声をあげ、走り回る子供。 **人なつっこく笑顔**を振りまく子供・・・

しかも、どんなに**貧しい家の子**でも必ず「ありがとう」とお礼を言う。

カッテンディーケ (長崎海軍伝習所の教官、オランダ人)

しからないで愛情を注ぐ親、自由でのびのびした子供。

日本人は、まるでルソー風の自由教育を実現しているようだ。

ルソー風自由教育（エミール、1762）

自然の秩序のもとでは、人間はみな平等であって、その共通の天職は、人間であること。教育とは、人間に本来のあり方を身に着けさせ、人間としてふさわしい生き方ができるように導くこと。

中世のヨーロッパには「子ども」という概念はないに等しかった。子供は人間の未熟な状態、あるいはできそこないの人間として意識されていた。だからそこには「子どもらしさ」という概念は成立しようがなかった。

ルソーは、教育 Education という言葉は、ラテン語の「引き出す」あるいは「導き出す」という意味の言葉。つまり人間として本来誰にもそなわっているもの、それを引き出すのが教育である、と説いた。

その意味で大人も子供も一緒に遊ぶ、江戸期の日本社会の姿は西洋人から見ると、最先端の教育制度と思われた。

フィッセル(オランダ人)

私は**子供と親の愛**こそは、日本人の特質の中に輝く 2つの基本的な**徳目**であるといつも考えている。 このことは、日本人が、生まれてからずっと、**両親が子供のために捧げ続ける思いやり**の程を見ると、はっきり判るのである。

そのような場合、全てが丁度、返礼であるかのように、

子供たちが親に報いるのである。

子供の中に見える、日本人の本質

モース(前出)

少女の顔が二つ、戸口にあった。一人はこの家に住む料理番の娘、もう一人はその遊び友達だった。9歳か10歳ぐらいであろう。

少女たちは戸口から、私の部屋の中を覗き込んでいる。

陶器や数々の標本類、雑記帳・・・。

部屋を埋めたおびただしい文物に、興味をそそられているだった。

私は二人を呼んで、紙と鋏を渡した。

これをどう使うか、観察してみるつもりだった。人形や鶏、鷺（サギ）・・・少女たちは、鋏を器用に動かして、紙切れの中から、複雑な形を切り抜いていった。

好奇心のあまり、私は
次に土瓶と茶碗を渡してみた。



二人は相対して座り、一人がお茶をつぐまねをして、茶碗を差し出した。すると、もう一人は丁寧な言葉でお礼を言い、うやうやしくこの茶碗を受け取った。（何気ない「ままごと」の光景にモースは、英国のティー・セレモニーかと、目を奪われる）

彼らは「貴婦人ごっこ」をしていたのではなく、かく丁寧にするよう、育てられて来たまでの話である。彼らはせいぜい九つか十で、衣服は貧しく、屋敷の召使の子供なのである。



モース(前出)

ある秋祭りの夜、女の子二人に10銭ずつ持たせた。

どんな風に使うのだろうかと、興味があった。

かんざしを売る店に一軒一軒立ち寄って、女の子はあれもこれもと手に取った。

飽きずに一品一品、念入りに調べ上げた挙句、たった5厘の品を1,
2本買っただけだった。

店を出ると、物悲しい三味線を弾く女がいた。

路上に座り込んだ盲目の乞食であった。

二人はその前を通りかかると、

それぞれ1銭ずつ取り出して、

当たり前のように、女のザルの中に

硬貨を落とした。



江戸の時代背景

- ・自給系の確立 …… 鎖国（宇宙船地球号との符合）
- ・士農工商の身分制度 …… 武士社会を維持するための都市
- ・予想以上に開かれた自治…… 個人より優先される共同体
- ・寺子屋教育（生活のため、生きるための教育）

この時西欧は、植民地政策と産業革命（無限の世界）

日本は、教育革命（生きてきた人に自分を重ねる・有限の世界）

そもそも、 発展とは何なのか？

「あんな遅れた時代には戻れない」と言うが、それでは、

江戸時代には何が足りないのか？ 持続可能であった江戸期の社会に、

何を足せば・・・科学？経済？グローバリズム？

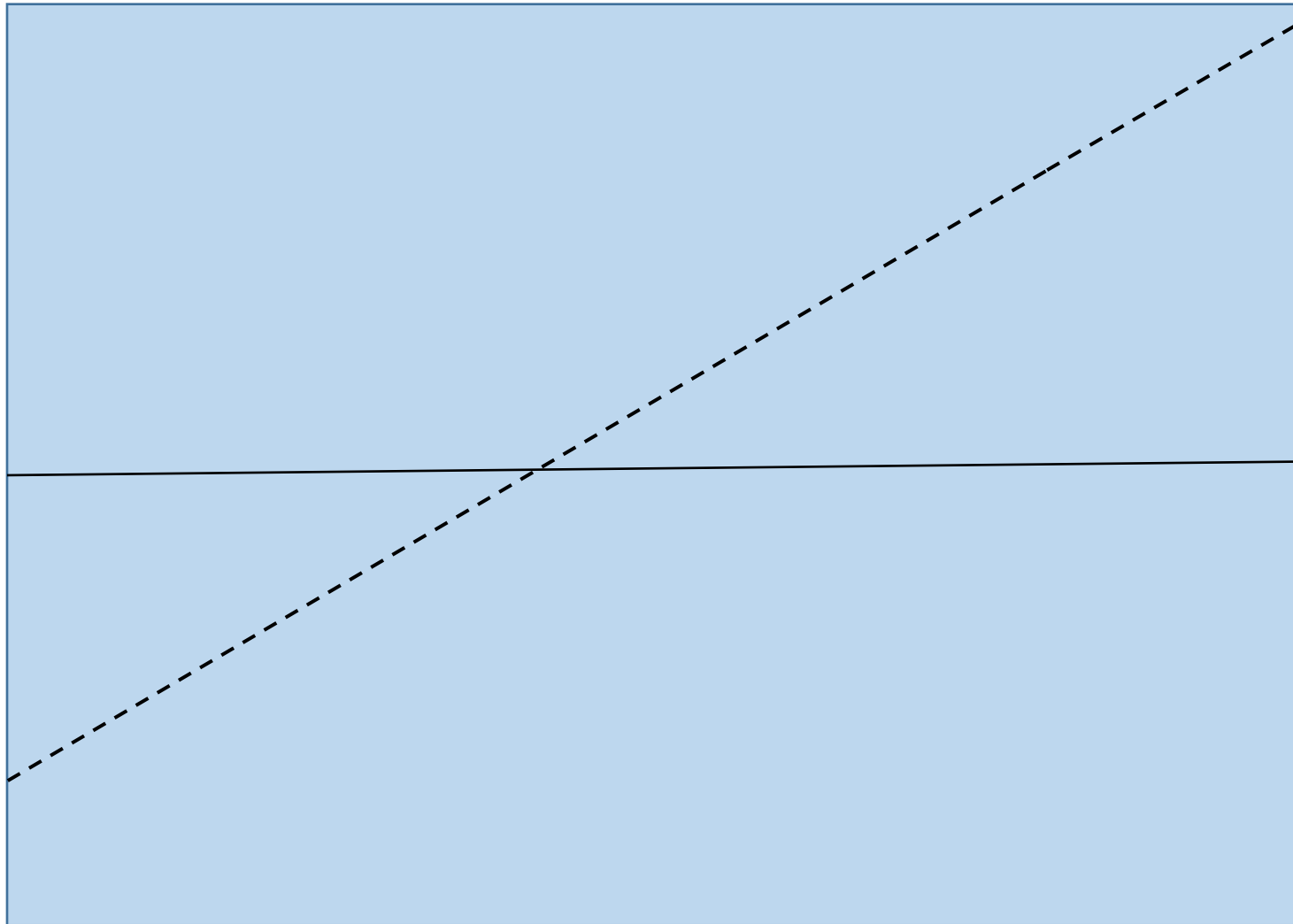
例えば、江戸の「寺子屋」の教育は、

「個別最適化した学び」

そもそも、**発展**とは何なのか？



「直進する時間」と「循環する時間」



文明 (経済・技術・科学)
「直進する時間」
(都市・**農業**)

文化 (自然・知恵・**環境**)
「循環する時間」
(江戸・**農**)



バランスこそが**持続可能な社会**

江戸期

高度経済成長期
(懐かしい昭和)

society5.0

江戸の教訓

- ・修繕、リサイクル業が主産業 ⇒ ゼロ・エミッション
- ・都市と周辺の農村を一体としたエコシステム ⇒ 循環社会
- ・社会の「自治」と、人々の「節度」 ⇒ 自立、大人の社会
- ・美術、文学、演劇等の優れた芸術的な水準 ⇒ 創造力



（自然と自分がつながっている社会）

多くの年代で維持された**庶民の明るさ**と**好奇心**

(人への興味、無関心の存在しない社会)

子供や**自然**に対する**愛情**

(次世代への責任と希望)



人類の未来に対する**希望**